In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『河音能平著作集』：(全五巻、文理閣刊)
Author	仁木, 宏
Citation	市大日本史. 16 巻, p.208-209.
Issue Date	2013-05
ISSN	1348-4508
Type	Article
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

【新刊紹介】

『河音能平著作集』（全五巻、文理閣刊）

仁木　宏

河音能平氏の著作集全五巻が二〇一〇年から一一年にかけて刊行された。刊行の案内については、昨年の『市大日本史』第一五号（二〇一二年五月）にも載せられているが、簡単に内容を紹介しておきたい。

河音氏は、一九三三年に神戸市で生まれ、一九五七年、京都大学文学部を卒業した。同大学院博士課程、同大学研修員、助手などを経た後、一九六八年、八代学院大学（現在の神戸国際経済大学）に助教授として赴任。一九七一年、大阪市立大学文学部に助教授として着任。教授を経て、一九九六年、定年退職し、名誉教授となった。二〇〇三年、永眠。享年七〇歳であった。

本著作集は、第一巻『中世の領主制と封建制』、第二巻『天神信仰と中世初期の文化・思想』、第三巻『封建制理論の諸問題』、第四巻『中世畿内の村落と都市』、第五巻『中世文書論と史料論』からなる。河音氏が生前に刊行された五冊の著書に収められている論文に、未収録の論文を加え、それらを五つのテーマに沿って編集したものである。

第一巻では、まず河音氏の第一論文集『中世封建制成立史論』（東京大学出版会、一九七一年）に収録された諸論文が目をひく。一九六四年北京科学院シンポジウムのために執筆された、著名な「中世封建時代の土地制度と階級構成」をはじめ、一九六三年日本史研究会大会報告である「中世社会成立期の農民問題」などである。農奴主階級（大名田堵）の封建領主（在地領主）化と国家権力のあり方や荘園体制のかかわりを論じたり、人民大衆の反封建闘争、あるいは、上層農民の政治的共同組織（村落）の結成と中堅・下層農民大衆の村落秩序からの排除などを実証的、理論的に著している。この他、中世前期における、女性の社会的地位について論じた論稿も収められている。

第二巻には、文化・イデオロギーに関する論文が収録されている。河音氏は、封建制研究を進める一方、「日本民族」（フォルク）の成立の研究にも精力的に取り組んだ。「『国風文化』の歴史的位置」、「王土思想と神仏習合」、「日本院政期文化の歴史的位置」などの諸論攷を通じて、国風文化が民族文化の形成に果たした役割を解明し、当該期の農村が中世的王土思想を生み出す母胎となったことを評価している。晩年には「天神信仰」研究を集中して行い、「道真＝超怨霊」説を主張した。

第三巻は、『中世封建制成立史論』第二部の理論的論攷を中心に編まれている。「農奴制についてのおぼえがき―いわゆる「世界史の基

本法則」批判のこころみ―」は、副題の通り、アジア的、古代的、封建的などの諸生産様式が、各民族に共通して貫徹する歴史発展のコースであるとするかのような「基本法則」をきびしく批判する。小経営生産様式の普遍的な存在を前提に、それらが共同組織を形成し、農奴制支配の条件になっていたともする。また「歴史における人民闘争の役割」は、和辻哲郎・津田左右吉・柳田国男らを「日本文化論」と一括して批判するもので、河音氏が歴史学研究における政治的・文化的主張をもっとも鮮明に打ち出した論文であると評価されている。この他、若狭国鎮守一二宮、ヤスライハナに関する論文も著名である。

第四巻は、自治体史での論述を中心に、大阪府内の地域史研究の成果からなっている。河音氏の封建社会成立論を一般の方々向けに著したものと位置づけられる。対象となっている地域は、島本町、高槻市、枚方市、大阪市（渡辺津・四天王寺）、美原町などである。そのなかで「縁共」や長者職、河内鋳物師、四天王寺舞楽などをあつかったものは、河音氏の代表的研究として知られる。中世前期の北摂の武士団・国人を位置づけた研究も貴重である。

第五巻は、史料論・文書論、国際交流に関する著作を中心にまとめられている。河音氏の史料学は、単なる古文書学ではなく、文書がモノとして機能するプロセスの動態を把握することで、「その時代の社会の骨格」にせまろうとするものであった。さらに河音氏は、史料の残存・伝来形態のなかに「民族」の形成と特質を見いだそうとしている。和泉河野家文書などの個別事例分析もふくまれている。一九九〇年の国際歴史学会議に参加したことを一つの契機として、河音氏は比較中世史料研究に集中的に取り組んだ。「中世文書のアドレス（名宛人）とその真の受け取り人―極東と西欧―」などが代表的成果である。

各巻の巻末には、高橋昌明、木村茂光、保立道久、吉井敏幸、高橋一樹氏による個性的かつ的確な「解説」が付されていて、河音氏の研究の歴史的意義がわかりやすく提示されている。拙文を執筆するにあたって参考にさせていただいた。また第五巻の大山喬平「特論　河音能平の時代とその歴史学」は、河音氏と時代、空間を共有した大山氏ならではの貴重な「語り」である。

河音氏の学問研究は、多くの方々が述べているように、実証が不十分な点もあり、また「幻想」に由来する部分もあった。しかし、個々の史料解釈から体系的な理論を導き、日本中世史の本質に迫ってゆくその姿勢は「凄み」を感じさせるものである。現実の政治世界との切り結びの中で中世社会を理論的に追究しようとする河音史学の魅力は、若い研究者のみなさんには容易に理解できないかもしれない。しかし、現実世界の厳しさに直面してともすれば学問研究の意義を忘れてしまいがちな我々には、河音氏の「直球」を時には正面で受けとめる必要があるだろう。